



脚本・監督＝中島哲也／出演＝
深田恭子／土屋アンナ／宮迫博
之／篠原涼子／阿部サダヲ／小
池栄子／樹木希林（東宝配給／
2004年日本映画／102分）

「バカバカしいけど、オモロイ映画」と思って観に行ったら、やっぱりオモロイ映画！ フリフリのお洋服を着た深キョンもいいが、ヤンキー娘の土屋アンナもすばらしいうえ、あのかつての美人歌手、篠原涼子も熱演。しかし、女同士のこんな友情ってホントにあるの……？

🎬 2人の女の子が主人公

2004年3月の今、岩井俊二監督の『花とアリス』が公開され、話題を呼んでいる。これは荒井花（ハナ）と有栖川徹子（アリス）という2人の高1の女の子が主人公の映画。

『下妻物語』もこれと同じように、2人の女の子が主人公。その1人が竜ヶ崎桃子（深田恭子）で、もう1人が白百合イチゴ（土屋アンナ）。桃子はロココ時代のフランスを夢見て、フリフリのお洋服を着ることに最高の価値を置いているケッタいな女の子。他方のイチゴは、暴走族のヤンキーで、「バイク命」の女の子。こちらは服装には興味はないが、なぜか桃子の父親が「営業」していた「パッターモン」の「ヴェルサーチ」に興味を示したことがきっかけで、桃子と知り合うことに……。

こんな両極端の2人の女の子の「友情」をマンガチックに面白く、かつ少し「感動的」に描いたのが、この映画。『花とアリス』はむちゃくちゃ良かったが、この『下妻物語』もバカバカしいストーリーながら、結構楽しめる作品。

下妻とは？

下妻とは、茨城県にあるまち。上野駅から常磐線で取手駅まで約40分。取手駅から常総線で下妻駅まで約1時間。桃子が、生まれ育った尼崎から、ダメ親父の母親、つまり桃子の祖母（樹木希林）の住むこの下妻の家に住みつくまでにはひとストーリーあるが、それは省略。

この下妻は田園風景広がる美しいまちだが、桃子が憧れるロココ時代のフランスの王侯貴族や淑女が住んでいたパリなどの洗練されたまちとは大違い。砂利道に牛のフンが落ちていたり、買い物は駅前のスーパー「ジャスコ」で済ませるといって「田舎まち」(?)。

ちなみに、私が修習生時代のうち前期（4カ月）と後期（4カ月）を過ごした東京の湯島にあった司法研修所の松戸寮があったのが、この常磐線の新松戸駅の1つ手前の馬橋まばしという駅。また私は下妻には行ったことはないものの、下妻のすぐ近くの関東鉄道竜ヶ崎線にある竜ヶ崎は、弁護士登録直後、結果的に無罪を勝ち取ったある刑事事件で、5年近く通った水戸地裁龍ヶ崎支部がある思い出の土地。

原作は乙女派小説家、嶽本野ばら

もちろん私は読んだことはないが、原作は乙女派小説家、嶽本野ばらの『下妻物語』。パンフレットによると「独特の少女世界を描く作家」とのことだが、まさにそのとおり。また、桃子が買うフリフリの洋服は「BABY, THE STARS SHINE BRIGHT」などの代官山にある現実のブランドとのこと。時々まちで見えるあの洋服だが、私は詳しくは何も知らないのでノーコメント。

面白い脇役陣

桃子の語りで進められる、桃子の出生から少女時代のお話はまるでマンガ。舞台は尼崎。父親（宮迫博之）は中途半端で「器の小さい」半ヤクザ。母親（篠原涼子）は桃子を産む時、担当の産婦人科の医者とデキてしまい、「玉の輿」に乗ったため、デキの悪い亭主と離婚。しかし、桃子は、毅然と「私はダメ親父と一緒に生きていきます！」と宣言。多分、この時から桃子は変わっていたのだろ

う。そして1人夢見る少女時代を経て、ロココ時代のおフランスに憧れ、「BABY, THE STARS SHINE BRIGHT」の洋服に出会って、人生の方向が決定した！ この桃子の性格形成の大半は、このケッタイな両親によるものだろう。

もう1人オモロイ人物が、このダメ親父の母親、つまり桃子の祖母（樹木希林）。今は桃子に甘える変なおばあさんだが、昔はどうもバイクに乗って……？

何か、いわく因縁がありそう……。その他イチゴ側にも、暴走族仲間の亜樹美（小池栄子）、イチゴが惚れる尾崎豊に似た（？）一角獣の龍二（阿部サダヲ）など、特殊キャラを決め込んだ脇役陣がズラリ。

こういう映画はあまり真面目に考えてはダメ。とにかくアハハと笑って楽しまなくちゃ。そう考えて観ていると、結構オモロイ人物たちだ。

結局 2人は似た者同士

なぜ、この2人の女の子の間に友情が生まれたのか？

それは意外にも、2人とも1本筋の通った自分自身を持っていたこと。これは、組織が大きくなるにつれて、規則だ、統制だ、という締めつけがきつくなってきた暴走族のボスに対して、「はみ出しモノで、規則や統制に従うのがイヤだからヤンキーになったんじゃないの！」と、イチゴがタンカをきるシーンに端的にあらわれている。

そして、暴走族から「抜ける」ために必要な「ケジメ」の場面に、「助っ人」として登場するのが桃子だが、桃子もフリフリの服を着ているのでチャラチャラした女の子かと思うと、どっこいそうではない。「素敵な洋服に出会うと、その服に似合う人になるためにはどうすればいいか一生懸命考える」という、ちゃんと筋の通った考え方を持った女の子。そのうえ、ダメ親父の下で育ったため精神的に強いうえ、刺繍の腕が抜群。いつも1人ぼっちで友達はいないものの、本人は「わが道を1人行く」のだから、全然寂しくなんかない。

こんな2人だからこそ、いつのまにか女同士の深い友情が……。これって、「ホントにいつまで続くのかな？」という不安はあるものの、すごく面白いお話……。

2004(平成16)年3月19日記